

後藤郁子（著）
『小学校初任教師の成長・発達を支える新しい育成論』
2014年 学術出版会 A5判 240頁 定価（本体4200円＋税）

齊藤 純*

本書は、著者が2013年9月にお茶の水女子大学より博士（社会科学）の学位を授与された論文「小学校初任教師の成長・発達の契機から捉えた育成論の構築—協働学習を通じた管理職の形成的介入に視点を当てて—」に一部修正を加えたものであり、公刊にあたっては独立行政法人日本学術振興会平成26年度科学研究費助成事業の交付を受けている。

本書は、矛盾と不合理に満ちた現在の閉塞状況を突破するというエンゲストロームの拡張的学習の理論を参考に、小学校初任教師の成長・発達の契機から捉えた新しい教育論の構築を目指すものである。すなわち、初任教師の学びを、従来の教授型・プログラム型の学びから、初任教師自らが自らの実践を分析し解決方法や方向性を見出し成長・発達を遂げていく協働学習への転換を目指すものである。

本研究は、小学校初任教師の成長・発達に関する次の研究1から研究4までの4つのテーマの研究を通して得られた結果をもとに、養成期の大学生も包含した新しい教師育成論として全9章にまとめられている。

研究1：初任教師の眼前で実際に起きている問題・課題とその問題・課題を乗り越える契機と学習サイクル

研究2：初任教師の成長・発達の契機を阻む要因

研究3：初任者研修としての学校組織内での協働学習のデザイン及び介入と初任・若手教師支援としての学校組織外での協働学習のデザイン及び介入

研究4：初任教師の成長・発達の萌芽期としてのインターンシップ

具体的には、第1章「本研究の背景」、第2章「研究の目的と理論的枠組み」、第3章「本研究における調査及び分析方法の概要」に続く第4章から第7章に、上記研究1から研究4が具体的に述べられ、第8章「本研究の結論」、第9章「今後の課題と研究の展望」という構成である。

第4章「初任教師の主体的な成長・発達の契機と学習サイクル」では、初任教師は自らのニーズから発した主体的な学習を通し、成長・発達の力としての仲介的概念ツールを生み出し、自らの問題・課題を乗り越えていくことを明らかにしている。更にその初任教師の成長・発達の契機を創出する学習サイクルは、初任教師と相互作用的に関わる介入者によって形成されることを明らかにしている。

第5章「主体的な成長・発達を阻む要因」では、初任教師の成長・発達を阻む要因とその問題性について明らかにしている。すなわち、現行のメンター制度の問題が初任教師を組織から孤立させてしまう危険性を孕んでいるということ。そして、初任教師がもっとも苦勞する「集団把握力」は、学級経営力に深く関わる能力であり、養成期の段階から育成すべき課題であるということである。

第6章「初任・若手教師の成長・発達の契機を創出する協働学習」では、初任教師の主体的な学びを中心にデザインされた協働学習に焦点を当てている。この協働学習では、語り合うことによって初任教師の抱えている葛藤や課題が可視化され、初任教師は自ら課題解決へのヒントやツールを見いだせることを明らかにしている。また、協働学習はミドルリーダーの育成にも繋がり、さらには管理職のキャリアカウ

* 大田区立松仙小学校

セリング的なアプローチ等の形成的介入は協働学習の充実化に有用なものであることも明らかにしている。

第7章「初任教師の成長・発達の萌芽期としてのインターンシップ」では、初任教師の成長・発達の萌芽期としてのインターンシップのあり方について試行し、その結果、養成期における現場体験の在り方を「指導の主体者としての実体験の場」に変えていくことで、集団把握力・学習指導力を身に付けることができるのではないかとすることを明らかにした。本章は、新しい教育観に立った初任者育成の必要性を論じた本研究の特色ともいえる部分であり、養成期の段階も含めた初任者育成システムの抜本的な見直しを主張する著者の強い思いが込められている部分である。

特筆すべきは、著者が研究者として現状分析を通して新しい育成理論を構築したというより、教育実践者として教育現場における若手育成の場に自らの身を置き、矛盾と不合理に満ちた現状をブレイクスルーしていくという正にエンゲストロームの「拡張的学習の理論」を自ら体現していく中で、初任教師や若手教師の心の叫びを本研究で代弁しているという点である。それは筆者が研究者になった経緯とも大きく関係している。筆者は、長年にわたり公立小学校において一般教員としてさらには管理職として、児童の育成は勿論のこと近年急増している若手教師の育成に力を注いできた。一方、学校現場においては、特に初任教師や経験の浅い教師が様々な場面で困窮し疲弊する姿が多く見られるようになってきた。こうした現状を目の当たりにすることが多くなった筆者は、矛盾と不合理に満ちた学校現場で教師を続けることに強く疑念を抱き、研究者となって現場の閉塞状況を打ち破ろうと精力的に研究活動を展開し始めたのである。著者にとって幸運だったのは、職を辞した後に進学した大学院において、エンゲストロームの「拡張的学習の理論」と出会ったことである。難解だった「仲介的概念ツール」も、エンゲストローム本人と出会い、直接の対話を経ることで、自らの理解の正しさに確信をもつことができた。こうした経緯により、筆者の若手教員育成に対する信念は、それを理論的に裏付けるエンゲストロームの「拡張的学習の理論」を拠り所として得たことにより、一層強固なものになっていったのである。さらに、筆者自身が自ら拡張的学習を深め、エンゲストロームの言う「ノットワーキング」である「第三の学びの場」を実際に創出するなど、研究における種々の葛藤を力強く奔放な研究スタイルでブレイクスルーしていく姿を温かく見守り、支援し続けた主任指導教員を始めとして、筆者のよき理解者として協力する様々な支援者のネットワークは、本研究を支える欠かすことのできない重要な要素であると言える。

団塊の世代の大量退職の時代を迎え、初任教師の激増とその育成の問題、更には、それに伴う学校力の低下の問題は、現在の教育界において前例のない待ったなしの大きな問題である。それだけに、行政の担当者や現場の当事者である管理職や育成担当者が、自らの経験に基づいて試行錯誤しながら現状を打破しようと努力しているが、必ずしも良い方向に向かっているとは言えず、初任教師や若手教師の多くが犠牲になっている現状を看過することはできない。

こうした現状を打破するために、教師の養成期から見直そうという筆者の取り組みは、実はこれまでの教育界においても個別の地道な取り組みとして長年に渡り営々と積み重ねられてきたことではあるが、それをエンゲストロームの理論を援用し見える化し理論化したことは大変画期的なことであり、現場で試行錯誤しながら困窮している我々にとって一筋の光明であると言える。本研究が礎となり、現在の日本の教師育成システム全体が根本的に見直されることを期待するばかりである。